

[図画工作・美術]

日本の美術に対する見方・感じ方を深め、 作品を主体的に鑑賞する姿勢を育む指導の在り方

ー学習する環境の構造化、整備の工夫ー

巻口 礼子*

1 研究の目的

中央教育審議会答申では、小学校図画工作科、中学校美術科および高等学校芸術科（美術、工芸）における課題への指摘として、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること等を充実させることの重要性がまとめられた。また文科省では、グローバル化する世界の中で、文化の多様性を尊重し受け入れる寛容な姿勢を育むための国際教育に力を入れ、異なる文化、文明を理解、尊重し受け入れる寛容さが国際的な摩擦を緩和し、平和な国際社会を維持する上で需要されるとしている。これを受け新学習指導要領に示されている内容は、各教科において国際化する社会の中で生きる人材の育成を目指すための目標となっている。国際社会を生きる人材に必要な素地として、自国の美術や伝統、文化を理解することを基に他国のそれを理解したり比較したりして、それぞれのよさや美しさを深く感じ取る力を身につけることが求められているのである。筆者は、学習指導要領の主張することは、国際社会に貢献するだけでなく、生涯にわたり伝統的、文化的でよりよいものを求め続けようとする人類の資質・能力を養うものと捉える。生涯学習の観点からも、美術館や博物館に足を運んだり、美術的、文化的なものやことに親しみ、生活を豊かにしたりしようとする態度を育むことにつながるものであると考える。

しかし、目の前の生徒の現状は、世界的巨匠と称されメディアに大いに取り上げられているゴッホやピカソといった他国の画家の名は知っているが、日本人の画家や作品については古びた地味なものという印象を強く持ち、ほとんど理解していない。学習によって自国の美術文化についての知識を付けさせたいところだが、生徒が理解していないこと、関心がないことについて、一方的な教え込みでは効果は期待できない。

一方、佐伯胖（1993）は、「人が学校で学んだはずのことでも、日常生活とかけ離れていることは次第に忘れ、知識として身に付いていないということが認知心理学的研究から明らかになっている」¹⁾と指摘している。佐伯が推奨する正統的周辺参加論を提唱しているジーン・レイヴとエティエンヌ・ヴェンガーによれば、「学習は社会的実践の一部であり、学ぶ、身に付ける場には何らかの『共同体』が想定されている。社会や文化の中に学びの共同体があり、学校や教室はその共同体へ子どもがつながっていくための橋渡しの場とみなすべき」²⁾としている。また「そこでの教師の役割は、本物の世界を垣間見せ、学びの共同体に参加する軌道を構造化することだ」³⁾と主張している。つまり授業で生徒が学ぶ環境を構造化し整え、教室、学校という場だけでなく、その先の社会や世界へとつながることを実感させることが真に主体的に学ぶ姿勢を身に付けさせることにつながると解釈する。

そこで、日本の美術を学ぶ授業において、知識を教え込むのではなく、学ぶ環境を構造化し整備することで生徒が主体的に学習に参加し、自ら日本美術のよさや美しさを追究しようとする姿勢を育む指導の在り方を探る実践に取り組むこととする。さらにその姿勢が、中学校卒業後の生徒の生活の中でも生き続け、社会の中で実践される学習となることを願う。

2 研究の内容と方法

(1) 研究の目的

鑑賞し話し合う授業を通して、日本美術に対する生徒の関心を高める。先行研究、論文から、学習する環境を構造化し整えることによって、生徒が主体的に学習に参加する姿を目指す。生徒が自分の見方・感じ方を持ちながら他者と交流し、意見を比較・検討してまとめていく過程で、積極的に日本美術に対するおもしろさを感じたり新たな発見や気づきを得たりする姿を実現する。生徒が主体的に日本美術の教材に関わり、自分から日本美術のよさや美しさを味わおう

* 長岡市立東北中学校

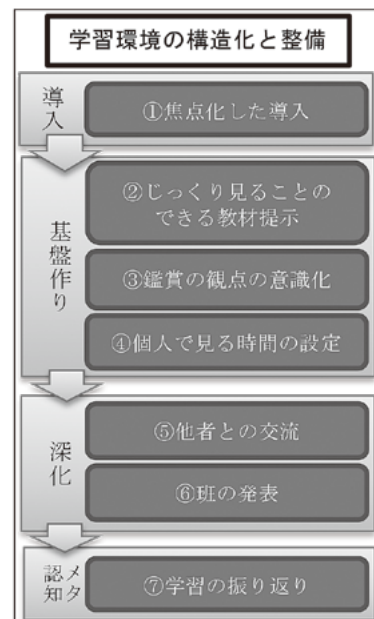
とする姿勢を養うことを目的とする。

(2) 研究の方法

中学校第2学年で、二つの題材を実践して検証する。生徒が主体的に学習に参加できるように、手立てを工夫し、学習環境として整備する。

- ①焦点化した導入…日本美術に対する関心が高められるような課題の設定や提示を工夫する。意外性やこれまで抱いていた印象と違う驚きを感じさせられるように教材を提示することで、生徒の興味を喚起する。
- ②じっくり見ることのできる教材提示…教科書の作品資料や作品を鮮明に印刷した作品カードセットを作り、生徒が手元で作品を見られるようにする。個人でじっくりと時間をかけて丁寧に作品を見ることができるようになる。
- ③鑑賞の観点の意識化…漠然と見るのではなく、鑑賞の手掛かりとして見て感じるための材料を生徒から引き出す。出てきたものをキーワードとし、鑑賞の視点として提示し、それを基に見方を広げたり深めたりすることができるようにする。
- ④個人の見方・感じ方を持たせる時間の設定…キーワードを参考にし、生徒個々に自分の見方を持つことができるよう、じっくりと作品を見る時間を確保する。推測や想像を奨励し、必ず感じたことの根拠を挙げながら見させる。
- ⑤他者の見方・感じ方を比較、検討する場の設定…班内で互いに見方・感じ方を出し合い、比較したり検討したりすることで、それぞれになかった見方・感じ方を取り入れ、更に意見を深められるようにする。
- ⑥他の班の見方・感じ方を知る場の設定…班で話し合ったことを発表する場を設定する。他の班の発表を聞くことで、更に多様な見方・感じ方を知る場をつくる。
- ⑦学習を振り返る時間の確保…自分の意見と他者、他の班の意見を振り返り、総合してどんな見方をしたのか、何を感じたのかをまとめる時間を設定する。生徒が学習を通して得たことをメタ認知させる場とする。

以上のように学習の流れを構造化し、その中で手立てや学習環境を整備し、生徒の鑑賞の仕方、発表の内容、学習の振り返りの感想などから、生徒が主体的に日本美術を鑑賞する姿勢が育まれていたかどうかを検証する。



3 実践の概要

(1) 実践1

- ① 題材名 「世界に誇る日本の美術・浮世絵」〈平成28年9月 第2学年8学級261名で実施〉 全3時間
- ② 題材の目標 日本の美術が西洋の美術に影響を与えたことに興味を持ち、日本と西洋の美術の比較を通し、それぞれのよさや美しさを感じ取り、味わい、美術文化に対する関心と理解を深める。

③ 授業の実際

【焦点化した導入】浮世絵に対する意外性の喚起

『大橋あたけの夕立』を模写した油絵作品を提示し、生徒に作者を問うた。「ゴッホ」という発言があり、笑いが起こる。そこで授業者の「正解」の回答に、多くの生徒から驚きの声が上がった。TVなどで知っていたと言う生徒も数人いたが、大半は知っている画家の名前が当たってしまった、という様子であった。ここで歌川広重の東海道五十三次『大橋あたけの夕立』を提示し、ゴッホの作品と並べて見させた。さらにゴッホの『タンギーじいさん』、モネの『ラ・ジャポネーズ』『睡蓮』等の作品を提示し、美術界の巨匠と言われ、誰でも知っている西洋の画家が日本の浮世絵の影響を多大に受けたことを紹介した。生徒は作品を比較して見ることで事実を知り、驚いた様子であった。

【基盤作り】本物との出会い、個人の見方・感じ方を持つ場の設定

「本物の浮世絵を見てみよう」と投げかけ、教科書（日文）の実物大浮世絵を見させた（図1）。教科書に掲載されているのは、葛飾北斎の富嶽三十六景から『神奈川沖浪裏』『凱風快晴』の2作品で、「実物大」ということと、紙質が



図1 実物大を鑑賞する

「和紙」であることが示されており、江戸当時の本物のイメージを湧かせることができる。この作品を見て、数名の生徒にどんなことを感じたか発言させた。富士山が描かれているという意見から「何が描かれているか」、波が大きく手のような形、雲の形が独特という意見から描かれているものの「形、大きさ」、空のグラデーションがきれい、複数の波の色があるという意見から「色」、富士山が遠くに小さく描かれているという意見から「遠近感、構図」、空の青と雲の白の対比がきれいという意見から「対比」などがキーワードとして挙げられ、これらを鑑賞の視点として共有した。そしてこの視点を基にしながら、個人で浮世絵をじっくりと見る時間をとった。作品を見ながらワークシートに生徒自身が見付けたり感じ取ったりした浮世絵のよさや美しさを書き出させた。

『神奈川沖浪裏』 葛飾北斎	『凱風快晴』 葛飾北斎
・色が少ない。	・色が少ない。
・1つのものを大きくかいているおめ。	・1つのものを大きくかいている。
・迫力がある。	・雄大さがある。
・波の後ろに小さな富士山がある。	・朝日を浴びた赤富士のため、朝の時間だとわかる。
・遠近の関係がある。	・グラデーションを使っている。
・波が大きく、荒れたい海を表現できている。	・朝日が当たっていることが明確にわかる。
・奥行きがある、立体的。	・伝わってくる。
・動いているように見える。	・緊張感を感じてくる。
・色は、青と白とで、迫力がある。	・遠近感が見える。
・ある。	・木々や草花が描かれている。
・波の高さがある。	・空の山の雲が白く夏を感じさせる。
・波の奥まで細かくかいている。	・大きな波がある。

図2 生徒Aの鑑賞ワークシート

【深化】自分の見方・感じ方と他者、他班の意見を比較し、検討し深め、広げていく場面

次に、それぞれが書いたワークシートと教科書の浮世絵を持ち寄り、班を作って互いの意見を交換させた。図2に示すのは、生徒Aのワークシートである。班の仲間と同じ意見にはアンダーラインを引き、自分になかった意見は書き足すように指示した。それをまとめ、班ごとに学級全体発表を行った。発表で出てきた主な内容は次のようなものであった。

〔神奈川沖浪裏〕・色数が少なく単純で分かりやすい・波と富士山の三角の形がリンクして視線を集める・波が大きく富士山が小さいので遠近感がつき、迫力が感じられる・天候が悪く荒れていることが船にしがみつくと細い手のような形の波の形と水しぶきから分かる・波のカーブと船のカーブがうねりの勢いを感じさせる・青い色に海の重さと強さがある・襲い掛かる波と動かない富士が動と静を表している・青の色がきれい

〔凱風快晴〕・一番上が暗く、宇宙に近いほど富士山が大きいと感じる・富士山が中心に描かれていないので、すそ野が広く大きさや広がりがある・空の青、林の緑、山の赤、雲の白の色の対比が映える・大きく富士山を描くことで臨場感があり、これぞ日本の象徴という感じがする・グラデーションで空や富士山の高さが表現されている・麓の木々の緑と残雪と空の青さから夏を感じる・雲の形が流れている風を感じさせる

どの班もキーワードを視点として自分たちで出し合った見方・感じ方による浮世絵のよさや美しさを発表することができていた。他の班の発表を聞きながら、「すごい」「本当だ」という声も度々上がり、生徒は共感したり新しい発見を得たりする様子を見せながら発表会を終えた。

【メタ認知】自分が学んだことを振り返る場の設定

班内の意見交換や他の班の発表を聞いて感じたことや考えたことを振り返りとしてまとめさせた。次に示すのは生徒の題材終わりの感想である。

(生徒B) たった1枚の絵にこんなに多くの工夫やよさが詰まっていることを心からすごいと思いました。色をたくさん使い、カラフルに描く外国の絵とは違う、色が少ないからこそ伝わるよさもあるということを知りました。また、班の発表を聞いて、富士山の雪の量で季節が表わされていることや、強調するためにされているたくさんの工夫なども知ることができ、とても勉強になったと思います。この学習を通して、日本の芸術の美しさや繊細さを学びました。昔、道具があまりなかった時代にもこんなに美しい絵を描けることは本当に尊敬したいと思います。この日本の文化や芸術をこれからもずっと受け継いでいってほしいです。

(生徒C) とても日本の美術はすごいんだと感じました。私は初めてこんなにじっくり見たけれど、外国人が真似したくなる気持ちがすごく分かりました。特にすごいと感じた所は、浪や山の迫力です。他の所よりも大きくダイナミックに描かれていて、とても目を引き寄せられました。また、浪と船、木と赤富士など、大小をととても強調していて、より迫力が伝わってきました。これからはもっと日本の美術に興味を持っていきたいと思います。

(生徒D) 海外の絵は油絵で、少し濁ったような印象があるけど、日本の美術はさっぱりしていてすごく見やすいと思った。日本の美術にもしっかりと目を通せば、意外と分からなかった魅力があるんだと感じた。

※下線筆者加筆

この後、新たに知ったことや印象に残っていることを書き出させ、学んだことや感じたことの定着を図った。そこには、浮世絵が諸外国の画家に多大な影響を与えていたこと、浮世絵版画は多版であること、彫師や摺師など複数の人で作られていること、北斎や広重といった浮世絵師の名前が記されていた。

④ 考察

生徒にとっては、最初にゴッホが広重の浮世絵をそっくり模写していた事実を提示したことが大きな印象付けになった様子であった。外交も発達していない時代の日本の物が西洋の画家とつながっていたという、生徒が社会科等で学習して持っていた曖昧なイメージに対し、作品を並べて見てはっきりとさせることで、浮世絵を見る姿勢が変わった

と感じた。教科書掲載の浮世絵作品に対しても、「当時もこのような感じだったのか」と質問する生徒もあり、時代を感じられ、浮世絵を強く印象付ける教材となった。生徒は個人で浮世絵を見る場面では集中して鑑賞し、大半が図2に示したワークシート程度の内容を書き出すことができていた。生徒が発表した意見の中には画集の解説ではないかと思うような内容があり、授業者も驚かされる意見が度々挙がった。一方で、一般的な解説にはない生徒独自の自由な見方・感じ方があり、それが更に浮世絵への関心を高めることにもつながっていた。授業者や資料による解説は一切ない状態でこれらの見方・感じ方が出されたことは、生徒が自分から関心を持って作品をよく見て、自ら実感した浮世絵のよさや美しさを発見していったためと見とれる。さらに、自分の見方・感じ方を持って他者や他班の意見を聞くことによって、実感を伴って新たな気づきを得たり共感したりする姿が見られた。学習をメタ認知させる場面での生徒の感想を見ると、キーワードを視点にしたそれぞれの様々な見方・感じ方が書かれており、生徒が浮世絵のよさや美しさを具体的に見だせていたことが見とれた。生徒の感想の文中に加筆したアンダーライン部に見られるような「おもしろい」「もっと見たい」「関心を持てた」「～に気付いた」などの浮世絵の見方に変化があったと捉えられる言葉が記述された感想は全体の6割程度であった。これらのことから、おおよそ生徒は浮世絵に対する印象が変化し、主体的に浮世絵作品を見て、鑑賞眼を豊かにしながら見方・考え方を深めている様相を見とることができた。

(2) 実践2

① **題材名** 「祈りのかたち・仏像の美」〈平成29年2月 第2学年8学級260名で実施〉 全3時間

② **題材の目標** 仏像には様々な種類があり、それぞれに特徴があることに興味を持ち、それらから感じ取ったよさや美しさについて話し合いながら関心や理解を深める。

③ 授業の実際

【焦点化した導入】 仏像に対する関心の喚起

導入で学習課題「仏像の絵を描いてみよう!」を提示した。これは、普段生徒の頭の中にある曖昧な仏像の印象に焦点を当てるものである。多くの生徒が頭の中に仏像のイメージはあるものの、描くことができないという反応であった。断片的でも漫画でも構わないので描いてみるように助言すると少しずつ鉛筆を動かすようになった。ある程度描けたところで互いの描いたものを交換したり見たりさせると、笑いが起きたり納得したりし、「仏像ってどんなだったっけ?」という点に生徒の意識が集まった。

【基盤作り】 仏像と出会う教材の提示、仏像を見る視点の意識化とじっくり見て感じる時間の設定

次に授業者は、A如来、B菩薩、C明王、D天の4つの仏像グループをそれぞれ4体ずつ印刷したA4サイズの仏像カードを作り、生徒一人ひとりがじっくり見ることができるようにした(図3)。カードを見ながら、「そう、こういう手の形!」「着ている服って、こんなだったっけ」などというつぶやきがあちらこちらからあがった。そこで、生徒に自分がかっこいいと思ったり好きだと思ったりするグループで順位をつけるように指示した。そして生徒が一番に順位をつけた仏像グループの4体の仏像について、じっくり見て気付いたことや感じたことをワークシートに書き出させることにした。生徒には仏像を見るポイントとして、次の視点を与えた。



図3 仏像カードでじっくり仏像を見る

○着ている物、履いている物 ○持っている物 ○乗っている物 ○格好、姿勢、体勢 ○手の形 ○顔、表情
○同じグループの仏像で共通していること・他の仏像グループと比較して違うこと

その上で、代表生徒を相手にそのポイントから推測したり想像したりして見方を深めることができるように師範した。以下はその際の発話記録である。

T: Eさん、何か一つ、自分が書いたことを挙げてみて。
生徒E: (如来の) 着ているものがシンプル。
T: 何でシンプルなんだろうね、Eさんはどう思う? 想像でもいいから、こうじゃないかな、という意見を述べてみて。
生徒E: もう、余計なものはいらないんじゃないかと思います。
T: すごい! 全て悟った偉い人だから、着飾る必要もないということか。
生徒E: (うなずく)
T: いいですね、こんな感じで理由を付けて、自分が感じたこと、見つけたことの見方を深めていきましょう。

この発話を例にして、生徒が選んだ仏像について様々な視点から見て、感じたこと、見つけたことなどをワークシ

トに書き出させる時間を設けた。

【深化】自分の見方・感じ方と他者、他班の意見を比較し、検討し深め、広げていく場面

生徒それぞれが書いたワークシートを持たせ、同じ仏像グループを選んだ生徒で班を作るよう指示し、話し合いに入らせた。仏像カードに加え、教科書や資料集も見ること推奨し、そこに書いてあることを参考にしながら意見を出せるようにした。その際、生徒が述べる見方・感じ方には必ず理由や推測を加えさせながら進めるように指示した。図4は、ある班が意見をまとめたものである。このように班でまとめた意見を文字化し見えるようにして、学級全体発表を行った。様々な意見が出されたが、それぞれの仏像について、いくつかの班が共通して出していた意見は下にまとめたようなものであった。発表された意見の中には、「如来は社長だから部下を従えている」というような子どもらしい見方の発想も多くあり、時折笑いも交えながら飽きずに発表に聞き入る生徒の姿が見られた。

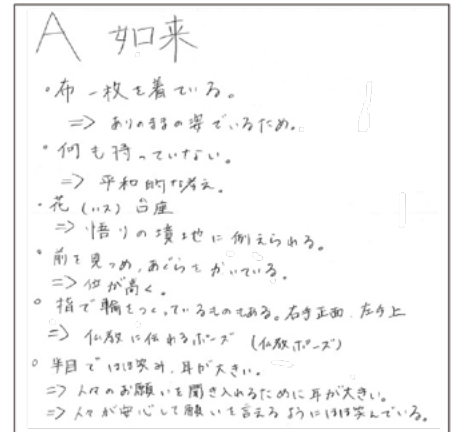


図4 班でまとめたシート

<p>A 如来</p> <ul style="list-style-type: none"> ・金色なのは高貴だから ・全てを見透かしているような目で人間を見守り悪いことも全部知っているよう ・手の形は願いの形で、願いによって違う ・菩薩を従えている ・あぐらをかいているのは位が高いから ・服が布っぽいのは、贅沢をしないため ・他のグループより人間らしさがない ・偉いオーラが周りに出ている 	<p>B 菩薩</p> <ul style="list-style-type: none"> ・王冠などの飾りがあって豪華で強そう ・頭の上に顔がたくさんあるのは、いろいろな方向を見るため ・手がたくさんあるのは、たくさんの人を救うため ・手にいろいろな物を持っているのは修行の成果 ・耳が大きくたくさんの方の意見や願いを聞いている ・福耳で福を呼ぶ ・飾りは魔よけ ・立って歩いて修行に励んでいる 	<p>C 明王</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飾りが多く武器を持っているのは力があるから ・怒った顔をして煩惱や魔を打ち砕く ・悟りの境地にいるからハスの花に乗っている ・後ろに炎が上がり、色が赤いのは怒りのため ・腕がたくさんあるのは武器をたくさん持てるように ・武器は迷いを断ち切る役割 ・おでこの目は人が見えないところを見る目 	<p>D 天</p> <ul style="list-style-type: none"> ・武装をしたり鎧を着たりしているのは戦っているから ・男性は武器を持って戦っていて、女性は小さいものを持って守っている ・立っているのは行動するため ・男性は戦士なので怒りの表情、女性は穏やかで守り神のよう ・悪いものを寄せ付けない ・性別があり、カラフルな色があり、人間に近い ・邪鬼を踏んでいる
--	---	--	--

【メタ認知】自分が学んだことを振り返る場の設定

発表会を行った翌週に修学旅行を迎え、生徒はこの授業を受けてから京都へ出かけた。修学旅行から帰り、その次の授業で振り返りを行った。次に示すのは生徒の学習のまとめの記述である。

<p>(生徒F) この学習をしてみてから修学旅行に行きました。そうすることで、いろいろな見学地で見た仏像を、これはあれに似ているとか、これはDグループだなど思うことができましたが、それぞれの特徴や形の意味など、京都ではもっと仏像に着目して見ていればよかったなと後悔しました。次に見る機会があれば、細かいところまでしっかり見るようにしたいです。そして仏像をもっと好きになりたいです。</p> <p>(生徒G) 他の班の人たちは、自分たちの班にない意見を持っていました。見方や感じ方などから、自分も学べたのでよかったです。新たに考え方が思いついたのもよかったです。修学旅行の前の授業などで知った仏像を修学旅行で自分の目で見て感じることができました。本物の美しさなどを感じられました。この授業で自分が見た仏像と授業で学んだ仏像を一致させることができたと思うのでよかったです。</p> <p>(生徒H) 仏像について、こういう機会がないとじっくり見たりすることができなかったのもよかったです。私は、京都の東寺に行つて仏像を見ました。何の仏像なのか、何を持っているのかなどよく見て、仏像について分かりました。仏像は目をつぶって、ぶつぶつ頭で、手を合わせている印象しかなかったけど、今回の勉強で持っている物の意味や何の仏様なのか分かり、仏像を見るときにじっくり見たいと思い、楽しかったです。</p> <p>(生徒I) 他のグループの仏像にも、いろいろな特徴があることが知れました。こんなにも仏像をじっくり見るのが今までなかったので、仏像の種類があることも知らなかったし、特徴があることも知らなかったのも、今回の授業では詳しく知ることができたのでよかったです。普段何気なく見ているものでも、深く見てみるといろんなことがあると思うと、とても楽しく感じるし、わくわくしました。仏像だけでなく、日本にはいろんなものがあるのもおもしろいと思いました。</p> <p>(生徒J) 今まで見ても何も感じなかった仏像だが、今回の学習を通して見方が変わったと思う。4種類の仏像はそれぞれに役割があって、持っている物や顔、姿勢などで見分けることもできた。その一つ一つを見れば、その時代に作った人が、どんな意図でどんなことを願って仏像を作ったかが見えてくるのも、仏像のおもしろさだなと思った。</p> <p style="text-align: right;">※下線筆者加筆</p>

最後に生徒にこの授業で学んだことを書きださせると、仏像は4つのグループに分けられること、それが顔や姿勢で見分けられること、それぞれに特徴があることなどが新たに得た知識として記述されていた。

④ 考察

本題材の冒頭にアンケートを採り、仏像に対する生徒の関心度を探った。図5に示すように、仏像には関心がないという生徒が全体の7割以上を占め、生徒の仏像への関心は大変低かった。これに対し、メタ認知での場面の生徒の感想では、アンダーラインを引いた記述に見られるような「おもしろかった」「関心が湧いた」

全く関心がない	29.4%
あまり関心がない	49.4%
関心はある	20%
かなり関心がある	1.2%

図5 題材前の生徒の仏像の関心度

「もっと見たい」「～と見るようになった」等の関心の高まりや意識の変化と捉えられる記述があったものが9割に迫っていた。この結果から、生徒が仏像に対する見方・感じ方の変化を意識している様子が読み取れる。それぞれの意見を持って班で話し合う場面では、仏像カードを指さしながら意見を出している生徒の姿もあり、仏像カードが手元にある状態で意見を出し合うことで更に多様な見方を出していく生徒の様子が見られた。仏像の見方については専門的な部分が多くあり難しいかと思われたが、本題材でも発表会を終えるまでは授業者から解説等は提示しなかった。しかし、生徒が発表した意見は一般的な解説に迫るものもあり、生徒は教科書や資料集にあるわずかな情報を手掛かりに主体的に仏像を鑑賞することで、発表内容にあるような見方・感じ方を深めていくことができていたと考える。また、見方の変化を意識した生徒たちは、修学旅行に出かけ仏像を見た際に「美術の時間に習ったのと同じだ」「本当に餓鬼を踏んでいる」などの発言をしていたと引率した教諭から聞いた。また、清水寺の参道の土産物店で小さな如来の置物を購入している生徒もあり、こういった行動からも美術作品としての仏像に対する生徒の意識の変化があったと分析する。

4 成果と課題

(1) 成果

- 学習の流れを構造化することについて、既存のイメージを揺さぶる課題提示→個人の見方・感じ方の顕在化→他者の見方・感じ方との交流、比較→学習のメタ認知という授業の組立を行った。最初に教材への強い印象付けを行うことで生徒の関心を高めた。関心が高まっていることで、主体的に教材に関わり、自分なりの見方・感じ方を持つ可能性を高められた。次に自分の意見を持って他者の意見と交流することで、共感したり、自分とは違った多様な見方・感じ方に触れ、そのよさや価値を感じたりすることができた。そして、共通性や多様性を実感することができ、自身の学びが深くなり、振り返る内容が充実した。このように学びを組み立てていく中で、生徒の見方・感じ方が次の活動で更に深まり、つながっていった。このような生徒の学びの姿から、それぞれの学習段階の自身の学びを関連付けながら主体的に学習に参加する授業が成立していたと分析する。
- 学習環境を整備することについて、生徒が手元でじっくりと見られる教具を用いること、何を見るのか、どこを見るのかといった鑑賞の手掛かりとなるものを提示すること、個人の時間、他者との時間を設定することを手立てとして実践した。それにより単位時間での学習に集中する環境が作られ、生徒の学びが焦点化し、主体的に鑑賞しようとする姿勢で作品を見ることができていたと考える。
- 日本美術への見方・感じ方を深め、主体的に鑑賞する姿勢を育むことについて、授業では生徒が作品を媒体として積極的に話し合う様子が見られ、全体発表の内容が多岐に渡り充実したものになっていたことや、感想に関心の高まりと見とれる記述があったことから、この目的が達成されていたと考える。特にメタ認知の場面での感想では、生徒の日本美術に対する見方・感じ方が自分の中で広がったり深まったりしたことを意識して記述している部分があった。浮世絵、仏像と鑑賞を進めていく中で、自分の変化を認識する生徒の割合が増え、日本美術への関心を高める主体的な姿勢への変容を見とることができた。学習を構造化し、授業を進める中で生徒が作品を主体的に鑑賞し、実感したことが発表や感想に反映され、日本美術に対する見方・感じ方を深めることができたと分析する。

(2) 課題

- 美術科の授業時数が限られている中で、鑑賞の授業に十分な時間を割くことが困難な面がある。題材全体を構造化し、学ぶ環境を整備することで、学習活動の充実と効率化を図ることがますます必要になると考える。
- 本題材を学習した生徒は、その後学校行事である体育祭で般若の面や風神・雷神をモチーフとしたパネルを描いた。これが日本美術に対する関心が高められたことと関連するかを分析することは困難であるが、冒頭で述べた教室を出て社会へつながる学習への影響や変容については、今後の生徒の成長の過程で見とっていくこととなる。

<参考文献>

- 1) 2) 3) ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー著 佐伯 胖 訳 『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加－』産業図書株式会社、1993年、pp.183-190
- 中学校学習指導要領解説 美術編 平成20年9月
- 教育創造vol.186 上越教育大学附属小学校内高田教育研究会発行、2017年7月14日
- 新潟大学附属長岡中学校研究紀要、2004年～2009年